

スーパーポジティブマン

第16期生 木幡 慶斗

小野ゼミ生活が終わろうとしている。学問を通じて、戦友とも言える一生の「仲間」を得て、彼／彼女らとともに過ごした日々は、私にとって、大学生生活の「青春」そのものであった。普段から、「青春」・「仲間」といった類の言葉を濫用しがちな16期の「熱血」キャラの私だが、今回は少し冷静になって小野ゼミ生活を振り返ってみようと思う（タイトルのことは一度忘れて、この先を読まれたし）。

さて、2年間の小野ゼミ生活を振り返ると、三田論に向けて激動の1年間を過ごした3年生と比較的穏やかな時間を過ごした4年生とでは対照的であったように感じる。一見すると、対照的な2年間であっても、私にとってのゼミ生活は次の言葉に集約される。それは「自分の無力さを痛感する」ということである。「無力さ」に関して、まず思い起こされるのがゼミ生活始まってすぐの「ゼミ長選」である。同期のみんなからの信頼を得られなかった自分の無力さを痛感した。次に「三田論」である。決まらないテーマ、自分の不用意な言動、そして深まるメンバー間の溝。論文代表としての無力さを痛感した。そして4年生になっても自分の無力さを思い知らされることが続く。まず、「後輩指導」である。ゼミ生活において、自分がどれほど彼／彼女らに寄り添っていたであろうか、どれほど有益な助言を与えられていたであろうか。過去の先輩方に与えられてきたもの以上のものを先輩として与えることができなかった自分の無力さを痛感した。そして、「卒論」に関しても自分の無力さを痛感することばかりであった。私の卒論は、アイデア、本文、統計分析、実験材、参考文献等々どれを取っても、先生はもちろんのこと同期の協力なくしては完成し得なかった。

図らずもここまで無力な自分を懺悔しただけの駄文になってしまったが、ここでタイトルに記載の通り、私はスーパーポジティブマンである。無力さを痛感しても不思議なことに落ち込んだことは皆無である。むしろ、その都度、無力な自分を省みて学びを得るということに貪欲であった。「ゼミ長選」においては、自分に周囲を説得させるだけの気概が足りていなかったことに気づき、自らの行動を改めようと努めた。「三田論」においては、仲間と信頼関係を築き上げる難しさとその重要性を知り、まずは自分がみんなからの信頼を得られるよう努めた。「後輩指導」においては、後輩たちに対する共感が足りていなかったように感じる。小野ゼミではやり直すことはできないが、社会人になって後輩ができた暁には、信頼関係を構築するため、共感することに努めてみようと思う。「卒論」においては、仲間に頼りながらも自分でやり抜く意思を持ち続けることの大切さを学んだ。そして、支えてくれた仲間への感謝は一生忘れずにいたい。

小野ゼミ生活は失敗と学びの連続であった。ここで大事なことは失敗から何を学び取るかということである。これから社会人生活に突入するが、どんなに逆境に立たされても、自らの置かれた環境を最大限活かすことに努めようと思う。そして、どんなに基本的で些細なことからも学びを得ようとする謙虚な心を忘れずに、自分らしく常に笑って生きていこうと思う。そうすれば、何とかなる気がしている。